様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月　 ９ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｈ０２２９９

研究課題名（和文）アンドレ・バザンの映画批評の総合的再検討

研究課題名（英文）Comprehensive re-examination of Andre Bazin's Film Criticism

研究代表者
大久保　清朗（Okubo, Kiyoaki）

山形大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：００６２４７１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、フランスの映画批評家・映画理論家アンドレ・バザンの著作群が、映画研究のみならず広く芸術論として意義を有していることを示し、その今日的な可能性を探ることであった。
　本研究では主に以下のような問題について取り組んだ。リアリズムの概念の再考、バザンのアダプテーション論、バザンのテレビ論、バザンのメディア論、バザンの批評的実践の特徴、バザンにとって日本映画である。
　こうしたテーマについて、いまだに翻訳されていないバザンのテクストを邦訳し、紹介した。また、この活動のために、毎年1冊の研究会誌を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　研究成果の概要にも書いたように、アンドレ・バザンの映画批評には、今日の映画研究においても重要な問題となるリアリズム、ダプテーション、映画以外の他のメディアとの関係といった問題が、時代に先駆けて論じられている。
　それらの可能性を検討することは学術的にも大きな意義がある。また社会の諸問題が複雑に交錯する映画というメディアに対する理論化は、社会的意義も大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this study was to show that the body of writings of French film critic and film theorist Andre; Bazin has significance not only for film studies but also for art theory more broadly, and to explore its potential today.
　The main issues addressed in this study were as follows. The following issues were addressed in this study: reconsideration of the concept of realism, Bazin's theory of adaptation, Bazin's theory of television, Bazin's theory of media, characteristics of Bazin's critical practice, and Bazin's theory of Japanese cinema.
　On these topics, we translated Bazin's texts, which have yet to be translated, into Japanese and introduced them. For this activity, we also published an annual study group journal.

研究分野：映画史

キーワード：映画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

フランスの映画批評家アンドレ・バザン André Bazin（1918-1958）は 40 年という短い生涯のなかで、映画をめぐって多岐にわたる批評活動を展開した。それは戦前戦後のシネクラブの組織、上映運動、さらに映画誌『カイエ・デュ・シネマ』の創刊、日刊紙・週刊誌などをさまざまな紙媒体における映画時評、映画祭報告、理論的考察など多種多様な著作によって特徴づけられる。とくにバザンが創刊した『カイエ・デュ・シネマ』誌は、その後、フランスの新たな潮流「ヌーヴェル・ヴァーグ」の一翼を担う映画監督たちが、批評家として活動していたこともあり、従来の映画史においてバザンは「ヌーヴェル・ヴァーグの理論的父」と見なされてきた。

バザンの理論の要諦は「リアリズム」と「作家主義」に集約される。バザンは、写真や映画が、従来の絵画などとは異なり、人工的な創造を介さずに現実をとらえる点に、それまでの芸術史上の劃期をなすきわだった特徴があると考えた。またそうした映画のリアリズムを十全に引き出した、一部の監督たち（ジャン・ルノワール、ロベルト・ロッセリーニ、オーソン・ウェルズ）を「作家」として顕揚した。こうした理論的枠組みによってバザンは、商業的価値においては回収できない映画の美学的問題を析出し、映画において重要なのは内容（物語、題材）のみならず、その様式（スタイル）にあると説いた。

こうしたバザンの考えは、そのリアリズムのナイーヴさ（そこに潜む神学的な価値化）、また「作家」的なアプローチの限界が批判されてきた。しかし 1990 年以降、映画研究が理論よりも実証主義的な再検討の段階に移行するにつれ、こうしたバザンの枠組みそのものが再検討されるようになっていった。記事数において 2600 本を超える膨大なバザンの著述が、2018 年にようやくフランスで全集として刊行されることによって、それまで単行本未収録だった著作物へのアクセスが、ほぼ一挙に解決するにいたった。

こうした近年の状況によって、徐々に明らかになってきたのは、バザンの批評の横断性であった。そもそもバザンのリアリズム論はアンドレ・マルローやジャン＝ポール・サルトルといった哲学者・思想家たちの読解と昇華によってなされたものであった。またテレビという映画以外の映像領域、またアニメーションという映画においてときとして周縁に追いやられてしまいがちなジャンルにおいても果敢に考察を試みていったことが明らかとなった。また、それまで黒澤明をめぐる批評のみしか知られることのなかった、日本映画への積極的な評価からは、彼の「作家」の顕揚とは異なる視座（「文化」の顕揚ともいうべき、別の競合的視座）が明らかとなった。

２．研究の目的

本研究では、海外の研究動向も踏まえつつ、バザンの映画批評を以下の観点から明らかにした。

①リアリズムの再考　バザンの批評の根幹にあるリアリズムの概念を考察することが、その研究の端緒となると考え、その批評的出発と目される著作「写真映像の存在論」の草稿研究、さらにその存在論の分類作業を通して、バザンのリアリズムの可能性を再検討し、明らかにした。

②イメージにおける「死」の問題　リアリズムにおいては常に問題となる、現実の表象可能性と不可能性についてバザンがいかに考えていったかを、ドキュメンタリー映画『闘牛』をめぐる問題として、また強制収容所を題材とした映画をめぐる批評をめぐって検討し、明らかにした。

③テレビとアニメーション　死の問題が、つねに存在と不在、生と死といった異なる領域の横断的思考を要請するものであったが、バザンの思考もまた映画と映画ならざるものとのダイナミックな横断性に目を向けるものであった。こうしたバザンの批評の横断性をめぐって、テレビとアニメーションというトピックから検討し、明らかにした。

④実践としての批評　バザンの批評が、抽象的に考えられた理論ではなく、現実的・物質的な実践を通して練り上げられたものであったことを歴史的に位置づける必要があると考えられた。それゆえ、彼のシネクラブ活動、そしてそこで実際に行っていた講義などから彼の批評的実践を跡づけてみた。

⑤バザンと日本　最後に、こうして日本からバザンの仕事を検討する本研究をいわば逆照射する試みとして、バザンから見た日本映画の問題を取りあげた。それは単に、非西欧のマイナー映画の時事映画評にとどまらない、バザンの映画批評のある種のエッセンスが見出される。それは作家（監督）よりも文化を、単独的な天才性よりも集団的な国民性を顕揚しようとする、バザンの批評的なスタンスである。そうした特徴を個々の映画評を通して明らかにした。

３．研究の方法

本研究では、5 つのテーマについて 5 年間の研究期間を通して順次検討していった。それらは研究代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者による対面での検討会、オンラインの検討会

などによって研究会員同士での勉強会を通して行われた。さらにそれらをより広く発信するために、海外の研究者を含めた国際シンポジウム、国内学会等の関連企画などを通し、広く発信した。またこれらの研究内容を年会誌『アンドレ・バザン研究』として書籍化し、後年の研究者に資するものとなるようにした。

４．研究成果

本研究における最も重要な研究成果は研究会誌『アンドレ・バザン研究』（以下、本誌）を、研究会員によって執筆・編集し、毎年の刊行を続けることができたことによる。5 年間（準備期間を入れると 6 年間）に毎年 1 号で全 6 号刊行を続けた本誌は、大学図書館等の研究機関はもちろん、入手希望者には無料（送料のみ自己負担）頒布を行うことによって、その研究成果を効果的に発信することができた。

本誌においては、年ごとに設定した研究テーマに沿うかたちで特集を組み、翻訳、論考、寄稿文によって構成された。なかでも本誌の重要な柱として、アンドレ・バザンの未邦訳のテクストを研究会員による翻訳がある。訳文は会員同士による厳正なチェックを行い、さらに訳者解題を付すことで翻訳の意義を高めることを目指した。また研究会員による論考も随時掲載したが、これも会員内の相互チェックをし、精度を高めるよう心がけた。また特集によって関連の深い、研究会員以外の映画人（研究者、批評家、アーキヴィスト、上映コーディネーター、映画監督）に寄稿を依頼し、多様性を高めた。

また研究活動を、広くアピールする場を設けるためワークショップ、シンポジウムも積極的に行った。特筆すべきは、2018 年、アンドレ・バザン生誕 100 年を記念して、東京大学と山形大学で行ったシンポジウムである。バザン研究の第一人者であるダドリー・アンドルー氏を招聘し、21 世紀におけるバザンの今日的意義を確認することができた。また山形大学においては、日本未公開のドキュメンタリー映画『闘牛』と、それについて論じたバザンのテクストをめぐって谷昌親氏、吉村和明氏を招聘し、ワークショップを行った。

また専用のホームページ（ブログ）を開設し、刊行およびイベント開催の告知を行うことができた。（参照 URL：http://cahiersandrebazin.blogspot.com/）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計36件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 角井誠	４．巻 5
２．論文標題 「リアリズムから遠く離れて――アンドレ・バザンのアニメーション論」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アンドレ・バザン研究	６．最初と最後の頁 6-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 アンドレ・バザン、角井誠（訳）	４．巻 5
２．論文標題 「アニメーション映画は生き返る」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アンドレ・バザン研究	６．最初と最後の頁 36-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 アンドレ・バザン、角井誠（訳）	４．巻 5
２．論文標題 「倫理的リズムあるいは九去法」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アンドレ・バザン研究	６．最初と最後の頁 39-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 アンドレ・バザン、角井誠（訳）	４．巻 5
２．論文標題 「ペリの危機」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 アンドレ・バザン研究	６．最初と最後の頁 42-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊津野知多	4．巻 5
2．論文標題 「不純な存在への賭け――バザンとテレビ」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン、伊津野知多（訳）	4．巻 5
2．論文標題 「永遠についてのルポルタージュ――『ロダン美術館訪問』」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 67-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン、伊津野知多（訳）	4．巻 5
2．論文標題 「映画館よりテレビ向きの映画もある」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 70-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン、伊津野知多（訳）	4．巻 5
2．論文標題 「テレビの美学的な未来――テレビは最も人間的な機械芸術だ」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 73-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン、伊津野知多（訳）	4．巻 5
2．論文標題 「テレビ、誠実さ、自由」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 80-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三浦哲哉	4．巻 5
2．論文標題 「魂の現実性とは何か――翻案、預言、反復」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 99-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀潤之	4．巻 5
2．論文標題 「リアリズムの臨界――バザンと収容所映画」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン、堀潤之（訳）	4．巻 5
2．論文標題 「『最後の宿営地』」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 127-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン、堀潤之（訳）	4．巻 5
2．論文標題 「収容所的ゲットー――『長い旅路』」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 129-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン、堀潤之（訳）	4．巻 5
2．論文標題 「『夜と霧』」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 135-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ダドリー・アンドルー（伊津野知多訳・訳者付記）	4．巻 第4号
2．論文標題 バルト、バザン、エクリチュール	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6．最初と最後の頁 34-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀潤之	4．巻 Vol.36
2．論文標題 「バザン生誕100周年記念イベント」報告	5．発行年 2019年
3．雑誌名 表象文化論学会ニューズレター『REPRE』	6．最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀潤之	4．巻 なし
2．論文標題 「「シネマ・ヴェリテ」の臨界点」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『Double Shadows／二重の影2　カタログ』山形国際ドキュメンタリー映画祭	6．最初と最後の頁 90-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン（堀潤之訳・解題）	4．巻 第4号
2．論文標題 「『希望』あるいは映画におけるスタイルについて」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6．最初と最後の頁 61-82頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 角井誠	4．巻 第4号
2．論文標題 「存在の刻印、魂の痕跡――アンドレ・バザンの（反）演技論」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6．最初と最後の頁 5-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン（角井誠訳・解題）	4．巻 第4号
2．論文標題 「スクリーン上の死」「報道か屍肉食か」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6．最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保清朗	4．巻 第17号
2．論文標題 「映画における晩年性――アンドレ・バザンとフランソワ・トリュフォーの老化をめぐる議論」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『山形大学人文社会学部研究年報』	6．最初と最後の頁 91-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 ダドリー・アンドルー（木下千花・堀潤之訳）	4．巻 第3号
2．論文標題 「この残酷な世界へのバザンのインテグラルな視座」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6．最初と最後の頁 6-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野崎歓	4．巻 第3号
2．論文標題 「〈インテグラル・バザン〉と出会うために――ダドリー・アンドルー の問いかけ」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6．最初と最後の頁 37-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三浦哲哉	4．巻 第3号
2．論文標題 「メトニミーについて――ダドリー・アンドルー講演の余白に」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6．最初と最後の頁 46-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンドレ・バザン（堀潤之訳・解題）	4．巻 第3号
2．論文標題 「脚色、あるいはダイジェストとしての映画」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6．最初と最後の頁 64-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 須藤健太郎	4．巻 第3号
2．論文標題 「映画は疑問符のなかに――「不純な映画のために」再読序説」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『アンドレ・バザン研究』	6．最初と最後の頁 92-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀潤之	4．巻 2
2．論文標題 パランプセストとしての「写真映像の存在論」――マルロー、サルトル、バザン以前のバザン	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 30-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊津野知多	4．巻 2
2．論文標題 アンドレ・バザンのリアリズム概念の多層性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 111-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀潤之	4．巻 2
2．論文標題 アンドレ・バザン「現実主義的な美学のために」「リアリズムについて」訳者解題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 11-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 堀潤之	4．巻 2
2．論文標題 アンドレ・バザン「写真映像の存在論［草稿］」訳者解題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 須藤健太郎	4．巻 2
2．論文標題 ダドリー・アンドリュー「フェティッシュの存在論」訳者解題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 66-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三浦哲哉	4．巻 2
2．論文標題 トム・ガニング「自身の似姿の中の世界――完全映画の神話」訳者解題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 94―97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊津野知多	4．巻 2
2．論文標題 アンドレ・バザン「モンタージュの終焉」「シネマスコープ裁判――シネマスコープはクロースアップを殺していない」訳者解題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 105-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保清朗	4．巻 2
2．論文標題 フランソワ・トリュフォー「アベル・ガンス卿」訳者解題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 141-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大久保清朗	4．巻 2
2．論文標題 フランソワ・トリュフォー「アベル・ガンス、無秩序と天才」訳者解題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 153-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野崎歓	4．巻 2
2．論文標題 アンドレ・バザン「批評に関する考察」訳者解題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 アンドレ・バザン研究	6．最初と最後の頁 174-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 角井誠
2．発表標題 「アンドレ・バザンとアニメーション」
3．学会等名 ワークショップ「アニメーションのイメージとは何か」、早稲田大学総合人文科学研究センター「イメージ文化史」研究部門
4．発表年 2020年

1．発表者名 堀潤之
2．発表標題 「写真映像の存在論」再考――アンドレ・バザンにおける運動と静止
3．学会等名 アンドレ・バザン生誕100周年記念イベント①「二一世紀のアンドレ・バザンに向けて」（東京大学）
4．発表年 2018年

1．発表者名 堀潤之
2．発表標題 「写真映像の存在論」再考――アンドレ・バザンにおける運動と静止
3．学会等名 映画批評フォーラム2018（アンドレ・バザン生誕100周年記念フォーラム、釜山シネマセンター）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 伊津野知多
2．発表標題 「存在に触れるまなざし――観客論としてのバザン的リアリズム」
3．学会等名 アンドレ・バザン生誕100周年記念イベント①「二一世紀のアンドレ・バザンに向けて」（東京大学）
4．発表年 2018年

１．発表者名 角井誠
２．発表標題 「魂の痕跡」としての演技ーーアンドレ・バザンの演技論
３．学会等名 アンドレ・バザン生誕100周年記念イベント①「二一世紀のアンドレ・バザンに向けて」（東京大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 三浦哲哉
２．発表標題 「メトニミーについて――ダドリー・アンドルー講演の余白に」
３．学会等名 アンドレ・バザン生誕100周年記念イベント①「二一世紀のアンドレ・バザンに向けて」（東京大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 須藤健太郎
２．発表標題 「「不純な映画のために」の仮想敵」
３．学会等名 アンドレ・バザン生誕100周年記念イベント②「映画とアダプテーション――アンドレ・バザンを中心に」（山形大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 角井誠
２．発表標題 「「存在論的猥褻さ」をめぐってーーアンドレ・バザンと死の表象」
３．学会等名 「バザン・レリス・闘牛　映画『闘牛』の上映とワークショップ」（山形大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大久保清朗
２．発表標題 「劇場としてのドキュメンタリー」
３．学会等名 「バザン・レリス・闘牛　映画『闘牛』の上映とワークショップ」（山形大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大久保清朗
２．発表標題 「死を復元するということ――アンドレ・バザンにおけるドキュメンタリー映画論について」
３．学会等名 「映像表現における廃墟と死――A・バザンとA・クルーゲ」（日本大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 大久保清朗
２．発表標題 「忠実さをめぐって――フランソワ・トリュフォー「フランス映画のある種の傾向」におけるアダプテーション批判」
３．学会等名 アンドレ・バザン生誕100周年記念イベント②「映画とアダプテーション――アンドレ・バザンを中心に」（山形大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 堀潤之
２．発表標題 バザンと「作家主義」の差異をめぐる3つの視点
３．学会等名 京都大学映画コロキアム「『アンドレ・バザン研究』第1号「特集＝作家主義再考」検討会」
４．発表年 2017年

１．発表者名 大久保清朗
２．発表標題 バザン研究の今日的意義
３．学会等名 京都大学映画コロキアム「『アンドレ・バザン研究』第1号「特集＝作家主義再考」検討会」
４．発表年 2017年

１．発表者名 木下千花
２．発表標題 アメリカにおけるアンドレ・バザンと作家主義政策の受容
３．学会等名 京都大学映画コロキアム「『アンドレ・バザン研究』第1号「特集＝作家主義再考」検討会」
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 渋谷哲也、サリー・シャフトウ、小澤京子、千葉文夫、中尾拓哉、伊藤はに子、筒井武文、赤坂太輔、竹峰義和、中島裕昭、金子 遊、持田 睦、堀 潤之、細川 晋	４．発行年 2018年
２．出版社 森話社	５．総ページ数 384
３．書名 ストローブ＝ユイレ	

１．著者名 堀潤之、木原圭翔	４．発行年 2021年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 312
３．書名 映画論の冒険者たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Cahiers Andre Bazin
http://cahiersandrebazin.blogspot.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	須藤　健太郎 (Sudoh Kentaro) (50837250)	東京都立大学・人文科学研究科・助教 (22604)	
研究分担者	野崎　歓 (Nozaki Kan) (60218310)	放送大学・教養学部・教授 (32508)	
研究分担者	木下　千花 (Kinoshita Chika) (60589612)	京都大学・人間・環境学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	三浦　哲哉 (Miura Tetsuya) (70711844)	青山学院大学・文学部・准教授 (32601)	
研究分担者	伊津野　知多 (Izuno Chita) (80308147)	日本映画大学・映画学部・准教授 (32726)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	堀　潤之 (Hori Junji) (80388412)	関西大学・文学部・教授 (34416)	
研究分担者	角井　誠 (Sumii Makoto) (90803122)	東京都立大学・人文科学研究科・准教授 (22604)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計3件

国際研究集会 アンドレ・バザン生誕100周年記念イベント①「二一世紀のアンドレ・バザンに向けて」（東京大学）	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 アンドレ・バザン生誕100周年記念イベント②「映画とアダプテーション――アンドレ・バザンを中心に」（山形大学）	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 バザン生誕100周年記念プレイベント「バザン・レリス・闘牛」	開催年 2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関